

Educo

地球時代の教育情報誌 **エデュコ**

No.21

2010年 冬

2 巻頭インタビュー

言語学者

金田一 秀穂さん

4 知っておきたい教育 NOW

若手教員に熱く期待して
石橋 昌雄
自信をもって理科の授業ができる先生に
石井 雅幸

8 世界きょういく見聞録

教師の同僚性 ―日本の教師文化の中核―
岩田 一正

10 地球となかよしトピックス

子が親に伝える郷土の誇り
船橋市立湊町小学校

12 インフォメーション 北から南から

14 地球となかよしメッセージ 2009
入賞作品発表

18 地球となかよしゼミナール

「調べ学習」が育む“未来を切り拓く力”
田代 高章

19 コラム いまどきコドモ事情

現実から、目をそらしてもいい
香山 リカ

20 ほっとな出会い

俳優・多摩川クラブ代表
中本 賢さん



きん だいち
金田一
 ひで ほ
秀穂さん（言語学者）

自分の気持ちにそぐう言葉、
 気持ちいいと思う言葉を使う。
 それが一番通じるんです。

子どものコミュニケーション能力が
 低下しているのではという意見が
 あります。

僕は、若者のコミュニケーション
 能力、少なくとも話し言葉、音声言
 語の表現能力は、昔より高くなって
 いると思いますよ。今の子どもたち
 は、インターネットなどで、言葉や
 文章や画像に触れるだけでなく、自
 ら表現し、発表する機会が増えてい
 ますから。

ただ、今の子どもに限ったわけで
 はないんですが、表現を受け取る側

としては、○か×かを決めたがる、
 とでもデジタルに世の中を理解した
 がるという風潮がありますよね。ハ
 ウツー的なことを上手に教える人た
 ちがいて、そうすると世の中マニ
 アルで生きていけると思っています
 う。

でも現実はそうではなく、○か×
 かわからないものに対して、例えば
 △だという考え方もあるし、この問
 題はそのまま保持しておくというや
 り方もある。さまざまな対応の仕方
 があるんだけど、特に後回しみたい
 なことを嫌がる時代というか、その

場で解決策を出さないといけない風
 潮がありますね。

子どもたちはとっても素直で、○
 だと言われた答えをすぐ信じちゃ
 う。教師の言うことや教科書に載っ
 ていることはすべて正しいと思っ
 ている（笑）。ほかの見方もある、こ
 れは間違っているかもしれないとい
 うふうには思わないですね。答えが
 ない問題も世の中にはいっぱいある
 わけで、究極の答えなんてどこにも
 ないと思うんですよ。答えはないけ
 ど、それに少しでも近づいていくと
 という姿勢が実は大事なんですけど

ね。

読書感想文などでも、結論を求め
 がちですよ。結論としてどっちな
 の、と言われても、「うーん、わか
 らない」とか言う子のほうが正しい
 かもしれない。わかんないけど、こ
 こに何かを感じた、ここが好き・嫌
 いという、それだけをわーっと書く。
 論理的に書かなくてもいいじゃない
 い。もったいい答えがこれから出る
 かもしれないし、さらに向こうに答
 えがあるかもしれない。でも、既に
 整備された答えをすぐに捉えようと
 するのが、今の世の中なんですよね。



PROFILE

金田一 秀穂

1953年東京都生まれ。東京都立西高校、上智大学文学部心理学科卒、東京外国語大学修士課程修了。ハーバード大学客員研究員を経て、現在、杏林大学外国語学部教授。祖父の金田一京助、父の金田一春彦とともに言語学者。著書に『新しい日本語の予習法』、『気持ちにそぐう言葉たち』など。辞典の監修も多数。

詩人の田村隆一は、若い子が「先生、これはすごいんです。どういうふうに詩にしたらいいでしょうか」と聞くと、「それは君、ちゃんと標本にしてとっておきなさい。22歳とかそれぐらいになってから言葉にしないさい。今、言葉にしてはいけないんだ」と答えたといいます。若い子が変にそこで言葉をつけてしまうと、とても大切なことを失ってしまうと、どうしても言葉にならない、でも気になる、というものを胸の中ですじととっておく。あわてて言葉にしないほうがいいと思うんです。

日本人の「話す」「聞く」ことについて、どのようにお考えですか。

僕がよく言うのが、なぜ日本人は英会話ができないかというと、他人としゃべること自体が苦手だからだということ。ともかく日本語でさえ、知らない人と何かをしゃべることが苦手なんです。ましてや外国人となるとね。大抵の国の人間は、知らない人としやべるということをそれほどおっくうがらないんです。

例えば日本では、子どもたちが授業中に黙っている。「質問！」なんて授業をさえぎるのが恥ずかしい。

先生のほうも、大切なことをしゃべっているんだから今聞くなとか言つて怒つたりする。だから、教室の中というのが、双方向じゃない。一方通行になりがちなわけです。双方向にやれば、これからもっとしゃべる子どもたちが出てくるでしょうね。ただ、先生たちは授業のコントロールが大変だ(笑)。

世界で一番えらいということになつているチョムスキーという言語学者がいるんですが、彼の*MITの講義、聞いている側はもう質問ばかりですよ。日本人だったら、僕をつまらない質問でこの大先生の講義という大切な時間を壊したらいけないかと思って、じつと黙つたまま聞いているでしょうけど、外国人は平気で「クエスチョン！」って質問するんですよ。チョムスキーはいかにもうれしそうにそれに答えるんです。

日本の大学だと、教えていても本当に反応ないですから。最初から、授業中に何か先生に言えると思つてないんですよ。でも、質問に答えることでこっちも新しいやり方ができるし、わからせているつもりだったけどそうじゃなかった、もつ

とわかりやすく説明しようとかいろいろ考える。教室の中で自由にしゃべれる能力というのが身につくのは有効なことだろうと思つています。ただ、日本のいわゆる慮りとか慎重さとか、そういう美德とは相容れないので、今後どうなるのかなというのには興味がありますね。

学校の先生は、子どもたちにどんな言葉で接するのがよいでしょうか。

人は、自分の気持ちにそぐう言葉を使うのが一番いい。先生も、自分が使つて気持ちいい言葉を使えばそれでいいと思う。それが一番通じるんですよ。子どもに対してかわいいと思うなら愛情表現できるし、間違つていると思えばきちつと叱れるはず。そういう言葉でなかったら子どもに響かない。子どもはすぐ、先生が本心に心から出してくる言葉というのわかりますよ。

雰囲気を探する、「鳴き声」のほろが人間は強いんです。「元気？」って聞いて、「うん」って答える、それだけで、ああこいつは本当は元気がないんだな、何か問題があるのかな、すつとわかるでしょう。先生と子どもが、お互いに鳴き声を聞くの

が本当のコミュニケーションじゃないですか。だから、心を通じ合わせることは、記号言語ってあまり必要ない。そんなことを言うと言語学者はいらなくなつちやいますけど(笑)。鳴き声の上に乗つたてるのが記号言語なんです。

だからまず記号言語以前に、人に教える人、人を動かす人は幸せであつてほしいですね。教師というのは幸せであるということが義務なんじゃないかと思うんです。そりゃ、職員室で腹が立つたり、お母さんたちと会うのが気が重いかはありますよね(笑)。でもやはり、教室では一番幸せ、教えていることが楽しいと思えるようであつてほしい。いつも明るく明るく、朗らかにしていることというのが子どもたちへの礼儀だと思ふんですよ。

そして、幸せであるためには化石化しないことだと思います。長年一つのことをやっている、どうしてもマニュアルになつちやう。そのルーティンから外れる、自己開発型、自己更新型とか、自分で脱皮できるような。教師は、そういう幸せな人であつてほしいと思つています。🌀

教師の育成

若手教員に熱く期待して



東京都武蔵野市立本宿小学校校長
石橋 昌雄

「子どもたちが来ないから、今日はつまらないです。」インフルエンザで学級閉鎖中の初任者の言葉である。こういう気持ちの人こそ教員にふさわしい人である。大都市周辺ではここ数年大量の若手教員が採用されている。よい意味で学校は活気づき、校内研究も少しずつではあるが盛んになりつつある。

その反面、児童・生徒との適切な距離感が保てず、親しくなりすぎて指導ができない若手教員や、逆にいつまでたっても児童・生徒と波長を合わせられず、初任者特有のがさがさした学級経営に陥っている教員もいる。ま

た、若手教員を指導する中堅教員の数も不足している。これからの日本の教育を支えるのは、まさに今の若手教員でありその育成に全力を注ぎたい。

今の若手教員は、そこそこまじめで穏やかである。ところが、自ら進んで求めたり、苦しさに耐えたりするのは苦手な人が多い。このような若手教員に、昔のように「自主的に研修しなさい。」「ベテラン教員の技術を盗みなさい。」と言うだけでは無理がある。場に応じてすべての学校職員で具体的な指導をすることが大切である。

本校では、若手教員や教育実習生が入ってくると、教員だけではなく、事務・用務・給食など学校で働くすべての職員が組織の中でどういう仕事をしているのか、個々に話を聞きに行く研修をさせている。これは、学校は組織で成り立っていることを意識させる第一歩である。

次におおむね経験5年目までの教員で「若手塾」を作り、空き時間や放課後を使い自主的研修会を行っている。ここでは授業研究を中心としつつも、授業後の協議会も重視し、どうすればよりよい指導ができるかについて実践的に学んでいる。

また全教員を対象に、長期休業期間には、講師を招き、特別支援教育、授業中の事故防止、新学習指導要領の改訂点などのテーマについての校内研修を実施している。さらに、

夏季休業期間には、研修報告会を行って各自が研修してきた成果を学校全体に広めている。校内研究は、2年間を単位として計画し、同じ講師に継続的に指導をお願いしている。

「未常識」と考え繰り返し教える

若手教員の指導で大切なポイントの第1は「常識」を身に付けさせることである。あいさつから始め、電話の受け答え、話の聞き方から、一つ一つ具体的に理想形を教えたい。非常識な行動も多々あるが陰で批判するのではなく、常識を教わってこなかった人つまり「未常識」なのだと考え「それは常識的にはこうするべきですよ。」と教える。ここで大切なことは、単なる「技術」だけではなく、なぜそうするのかという「考え方」も同時に教えることである。形ではなく実質を真似させることが求められる。こんなことまでと思わずにひとつひとつ指導していきたい。

「学校担任」という感覚を常に持たせる

第2は、「組織感覚」が身に付くように指導することである。そのためには、組織的な動きと服務がしっかりとできることが大切である。そこで一番大切なことは「私」と「公」をしつかりと分けられる人になることである。自分の好き嫌いはどうあれ、公としてせ

ねばならないことをしっかりとできる人が「教育公務員」なのである。また、自分の学級・学年という意識ではなく、学校全体の教員や主事などの関係性の中で、自分はどう動くべきかということを常に考えられる組織人になれるようにしたい。例えば、保護者に文書一枚出すのにしても、学校組織として出しているのだということを意識させたい。

「子どもと波長を合わせられる」ようにする

第3は、「人間関係形成力」が身に付くように指導したい。子どもは、様々なよさや可能性をもっている。また性格や生育環境も違う。これらをうまくまとめいくのが学級経営能力である。その基本は児童理解に他なら



楽しくためになる授業 — ひと工夫を重ねていく



学校外の研究会や学会での発表 — 自分の実践を世に問う

ルも満たされるものでなければならぬ。そのためには、シヨールのような見せるための大がかりな年一回の研究授業ではなく、ちよっと工夫した本場に子どもの学力が上がる研究授業を何回もやらせたい。大切なのは

「日常の授業の質を上げること」である。「学ばざる者教えるべからず」を常に意識させる

第5は、「研究・研修意欲」が持続するように指導したい。今は、数年勉強していないと、世の中の事象も学校の教育内容も激変している時代である。まさに「学ばざる者教えるべからず」という状況になっている。ここで大切なことは、好きな教科や興味・関心のあることばかり学ぶのではなく、苦手な教科やこれからの教育にとって不可欠な課題についても学ばせることである。また、学校外の研究会や学会などで発表させる経験を積ませることも大切である。

今、学校は、一時期の会議ばかりやっていた時代から、子どものこと、授業のことについて研究し合う学校へと変身しつつある。数多くの教育課題がふりかかろうとも、教員が常に初心を忘れなければ、必ずや未来は明るいものになるだろう。そのためには、若手教員の育成を担任せにしないで、学校全体で取り組むことである。「だめだ。だめだ。」と批判したり、「がんばりなさい。自主的に研修しなさい。」などと抽象的な励ましをしただりしている場合ではない。そんな暇があれば、労をいとわず手とり足とり教えてあげることが本当の指導であり親切である。☺

教師の育成

自信をもって 理科の授業ができる先生に



大妻女子大学
家政学部児童学科准教授
石井 雅幸

つの側面から主題に迫りたい。

内容面 — 理科を楽しむ

理科を苦手とする教師に理科についての感想を聞くと、先生方は「子どもから質問されてもわからないことが多く不安」「子どもの考えを生かしていくと、様々な方向に向かい、軌道修正ができにくいからいや」とおっしゃる。しかし、多くの教師は、子ども時代に、自然に触れてきたはずである。その際に満足してきたのは「昆虫や草花の種名を知っていること」だろうか。むしろ、気楽に自然を楽しんだり、実験を楽しんだりしていたのではないだろうか。教師はいつの間にか、子ども時代の、自然や物とかかわる楽しさを忘れてしまっていないだろうか。自然や物とかかわった時のワクワク感を再度想起できる場が先生方にも必要なのではないか。

教師自らが自然や理科的な物に思いつきり触れて、「おもしろいな、楽しいな」と感じる場をつくる。それにより、まずは、教師自らが理科を好きになってほしいと考える。

教師も行いやすく子どもが育つ指導技術

理科について、多くの子どもたちは「体を動かしながら観察や実験をするのは、楽しい。」でも、「仮説を考えたり、結論を考えた

りするの嫌い。」と言う。その多くの原因は、子どもが、何をどのように考え、何をどのようにまとめたかといったらよいかかわからないからだと考える。つまり、子どもが思考過程と思考を表現する方法を獲得していないのに、教師からは「仮説を考えなさい」「まとめを書きなさい」と言われるからではないだろうか。子どもは、自らもった問題を自ら解決できたならば、仮説を考えたり、問題を解決したりする活動に大きな自信をもち、おもしろさ、楽しさを感じるのではないか。

東京都小学校理科教育研究会並びに国立市立国立第五小学校では、子どもが主体的に問題解決活動ができるように、子どもに思考過程と思考の表現方法を学ばせる指導法を研究してきている。その中で見いだされた指導法が、以下の点である。

- (1) 問題解決過程の定着
- ① 問題解決の過程をしっかりと定着させる
- (2) 教師の提示事象の工夫
- ② 教師が、子ども自らが問題を見いだせるような事象提示を工夫していく(図1)
- (3) 思考の過程と思考の表現方法の定着
- ③ 特に、問題をつくる場面、仮説を立てる場面、観察・実験方法を考える場面、考察を行う場面で、教師がある程度決まった問いかけを繰り返していく。しかし、いずれは、教師が問いかけをしなくても、子どもが自ら仮説を考えたり、結論を導いたりすることができ

図 2

問題解決の過程	教師の問いかけ
事象と出会う	二つの事象の比較 「何がどのようにちがいますか」 「違いは何が関係しますか」
問題をつくる場面	
仮説を設定する場面	「どのようにすれば」「どのようになるか どうか」を調べることになりますか。
解決の方法を計画する場面 と結果予想を行う場面	「どういふ」ときには、「どのようになっ ている」ことを調べればよいですか。
観察・実験を実施する場面	
結果をまとめる場面	「仮説(結果予想)と結果では何がど のようにちがいますか」
結論を導く場面	「その違いの要因は何ですか」

図 1

- ### 事象提示のあり方
- 1 比較事象
 - 2 見た目は同じだが、違う動きや変化が見られるもの
 - 3 時間経過にともなう変化へ
 - 4 ねらい(問題)を焦点化したものから
 - 5 徐々に複数の変化が見られ、複数の要因が絡むものへ
 - 6 経験(既習事項も含めて)から判断できる
 - 7 子どもが自然事象から問題を見いだせるようになっていくのが大きなねらい

るようにしていく。(図2)

④ ③の場面での子どもの言い回しの一つのパターンを示し、子ども自らが、そのパターンの言い回しをできるようにしていく。

(4) ノートや記録の表現方法の定着

⑤ ノートの記録を問題解決の過程に沿って記述できるように指導していく。

⑥ 仮説や結論の記述の仕方を丁寧に繰り返して示すことで、子どもが書き方を獲得していく。

⑦ 中学年において、自然の観察を行う際には、子どもとともに観察の視点を見いだし、見いだした視点を繰り返し使う。観察記録も、見いだした視点で書くことができるように教師が声をかける。

前記①～⑦の七つの取り組みは、ある意味では繰り返し習得させていくものである。しかし、理科においては単元ごとに対象とする内容が異なり、対象が違って、ものの考え方や表現方法が同じであれば、子どもは「このときにもこの考えで進めればいいのか」と思うようになる。こうした子どもの思いが出てきたとき、教師からの働きかけを少なくしていく、子どもが自らできていくおもしろさを感じられるようにしていくのである。こうした取り組みを学校全体で行っていくことによって、学年進行にともない、子どもが主体的に活動できるようになっていく。

理科好きな教師をつくる時間と場

教師はどこで理科を好きになったり、理科の指導法を獲得したりしてきたのだろうか。一番が校内であり、その次が学校外での研修会や研究会への参加であっただろう。

かつて私が勤務していた東京都には、都の教育研究所があった。都立教育研究所は、理科部門だけでも物理、化学、生物、地学に加え初等理科教育の五つの研究室があった。各研究室は、物理・化学・生物・地学の内容と指導法の研修会を小・中・高等学校の校種別に開催していた。特に内容的なものが充実しており、個々の教師の必要度、興味・関心の度合いに応じた研修会が組まれていた。それに加えて、深く教育研究を行いたい教師には、研究が深められる場がいくつも用意されていた。すなわち、個々の教師の必要度に応じた研修の場があったとも言える。校内にも理科等に堪能な教師がおり、様々な情報を発信していた。

このような研修の場や時間を設けることは、即戦力育成にはつながらないかもしれない。しかし、確実に個々の教師の基礎的な資質・能力の習得を図れる場がつけられることは重要であろう。教師も、そのような場を積極的に求めていく必要があると考えている。



題が存在し、しかもその課題に取り組むために日本の学校や教師から学びたいとおっしゃったことは、世辞が含まれているとしても、国内ではとかく批判されがちな日本の学校や教師が、他国に誇るべき文化を形成しているということを示唆する出来事であった。

日本の同僚性の中核

両校長が注目する日本の教師文化における同僚性とは、何を中核として形成されるのであろうか。

職員室で同僚間でフォーマルなこともインフォーマルなことも日常的に話し合うこと、職員会議や校務分掌などを通じて、ボトム・アップの意思決定を行っていること、公立学校の場合、異動が必須であるため、中堅教師や熟練教師であっても各学校への馴染み具合に応じて他の教師に依存せざるを得ないことなどは、同僚性形成に寄与していると言えよう。

しかし、教師は教育の専門家であるのだから、授業や子どもの学びを媒介として同僚と連帯していく存在であると考えれば、授業・教育実践を同僚と共に検討・分析し、次の課題を探究していく校内研修や授業研究こそ、他の教師と教育に関する哲学やビジョンを共有し、授業や子どもなどに関して直面する困難について相互に依存できる関係を編んでいく中核となっているのではなかろうか。そして、この依存できる関係を通じて、一人ひとりの教師は脆さを抱えながらも、専門家として成長しているのではなかろうか。(これは、日本の子どもたちの姿でもある、と実践を観察するたびに、筆者は感じている。子どもの姿は大人の姿の反映と言える。)

時期や地域によって様式や内容、密度に多様性が存在するが、明治前期以降、日本の学校では校内研修・授業研究が行われ続けている。参加者に形式的



光陽製鉄南中等学校 (韓国・全羅南道光陽市)



光陽製鉄南中等学校での授業風景

な同調を強いている場合もあるかもしれない。しかし、授業研究・校内研修が長きに渡って継続しているという事実は、授業や子どもの学びを媒介として共に働くことには価値があり、その共働を通じて教師は成長するという認識が、日本の教師文化に存在していることを意味するものではなかろうか。

現在、教師が多忙化し、校内研修・授業研究の時間の確保が困難になりつつあると言われる。しかし、他国が学ぼうとしている日本の学校の同僚性が、校内研修・授業研究を中心として構築されているとするならば、その時間を確保しないことが、日本の学校や教師(そして子ども)にどのような事態をもたらすこととなるのかということを、改めて考えていく必要があるのではないだろうか。🌀

PROFILE

岩田 一正 東京大学教育学部学校教育学科卒業、東京大学大学院教育学研究科博士課程単位取得退学。専門分野は教師論、日本近代教育史、教育方法学、矯正教育。主な著書・論文として、秋田喜代美・佐藤学編著『新しい時代の教職入門』有斐閣、2006年(分担執筆)、大田直子・黒崎勲編著『学校をよりよく理解するための教育学3 教育の内容と方法(2)』学事出版、2006年(分担執筆)、「矯正教育からの示唆—少年院を中心に—」『グローバル化時代における市民性の教育—論文集(1)—』135-144頁、2007年、「学園都市が形成する教育文化—一九三〇年前後の成城学園を事例として—」『成城文藝』第189号、1-20頁、2005年など。

書籍紹介

『授業の研究 教師の学習

—レッスンスタディへのいざない—

秋田喜代美、キャサリン・ルイス編著
明石書店 2008年

本書を通じてわれわれは、校内研修や授業研究を通じて同僚性の構築を目指す試みが、日本の学校のそれを参照しながら、アメリカにおいて胎動していることを理解することができる。

世界 きょういく 見聞録



Vol.8 FROM USA / KOREA

世界には、さまざまな学びのかたちやプロセスがあります。

今回は、日本の教師文化を、アメリカ・韓国と比較することで、見直していきます。

教師の同僚性 — 日本の教師文化の中核 —

教師間の同僚性 collegiality を構築することが世界的な課題となっている。同僚性とは、学校において教師同士が協働やケア、支援、助言できる関係を意味している。教師同士が相互に依存できる関係とも言えるが、同僚性の構築という課題に関して、日本の学校や教師は他国からモデルとされている。

成城大学文芸学部准教授 岩田 一正

米国と韓国の校長が課題としていること

米国と韓国で訪れた二校の校長の言葉は、筆者が日本の学校の同僚性を見つめ直す契機となった。その二校とは、2002年に訪問したマサチューセッツ州ケンブリッジ市にあるハガティ・スクール（公立、日本で言えば就学前児童～小学校4年生が通う）と、2003年に訪問した全羅南道光陽市にある光陽製鉄南初等学校（私立）である。

ハガティでは、子どもたち（と教師）のあいだに聴き合う関係が成立し、静かに安心しながら学び合う姿を観察することができた。また、教室環境も日本のそれと比較すると彩りが豊かで居間の延長のようであり、机や椅子の脚には子どもの学び（合い）を妨げないように穴の空いたテニス・ボールが付けられ、パニックに陥った子どもたちを安心させるためにぬいぐるみが備えられているといった配慮が散

りばめられていた。（移動に伴う雑音を低減するため、机や椅子の脚にテニス・ボールを付けている教室は、日本にも存在する。）

光陽製鉄南初等学校は韓国最大の製鉄会社ポスコが出資する財団が運営する学校であり、教室などのIT環境は充実しており、子どもたちが簡単なTV番

組を制作できるスタジオまで設置されていた。また、先端分野の教育や施設面だけに力を入れているのではなく、「伝統文化教育」を表現活動として教科領域と教科外領域の双方に組み込んだカリキュラムの開発にも熱心に取り組んでいた。

教室などを観察した後、校長に学校の歴史、教育実践の特徴を伺い、それに続いて現在の課題は何かということを探ねた。期せずして両校長とも、課題はいかに教師の同僚性を紡いでいくのかということであり、この点について日本の学校や教師から学びたいとおっしゃった。特に、光陽の校長は筆者の宿泊先までいらっしゃり、日本の学校における同僚性を巡るさまざまな論点をお尋ねになった。

子どもの聴き合う関係、学び合う関係、学習環境、カリキュラム開発などについて日本の学校が学ぶべき点を数多く有している両校にも、直面している課



ハガティ・スクール（アメリカ・マサチューセッツ州ケンブリッジ市。市内には、ハーバード大学やマサチューセッツ工科大学がキャンパスを構える）

千葉県船橋市立湊町小学校

子が親に伝える郷土の誇り



干潟「三番瀬」のほど近くに位置する船橋市立湊町小学校（児童数 489 名、佐々木岩校長）。子どもたちは毎日、磯の香りをいっぱい吸い込んでいます。湊町小では、海のすぐそばという恵まれた環境を生かした体験学習や伝統文化を知る活動に積極的に取り組み、子どもたちの「地元」への関心をはぐくんでいます。

郷土料理づくりに挑戦

真剣な表情で海苔の上に寿司飯を延ばしていく子どもたち。挑戦しているのは千葉県房総地域に伝わる郷土料理「太巻き祭り寿司」づくりです。今回つくる模様は、桃の花。海苔の上に白い寿司飯を広げ、その上にピンクの寿司飯でつくった細巻5本、桃の葉っぱとなるほうれんそうを配します。中心には棒チーズを巻き込みます。こうして、金太郎あめのように、どこを切っても桃の花の模様が出てくる「祭り寿司」ができるのです。

目の前の海は、地域の誇り

湊町小学校では、郷土料理づくり以外にも、郷土を知る活動にさまざまに取り組んでいます。船橋市には54の小学校がありますが、海に面し、特に漁業が行われている地区が湊町小学校区なのです。そこで、力を入

れているのが、「海を知る」活動です。

このような活動に欠かせないのが、地元漁協や地域の方々の協力です。例えば3年生は、「三番瀬」の特産である「海苔」の学習を行っています。一年間を通して、海苔の種づけや海苔漉き、昔ながらの天日干し作業などに取り組みます。沖のほうの養殖場まで見学に行くことも。また、漁師さんから、一日の仕事の流れや魚の種類、さばき方など、たくさんのお話を聞き、地元に着した仕事の様子を学びます。

また、6月には、すぐ近くの三番瀬海浜公園で、全校での潮干狩りが行われます。そのときみんなの楽しみは、漁協の方や地域の方、保護者の協力でつくられる、郷土料理の「ふうかし」。アサリが山盛りの味噌汁です。

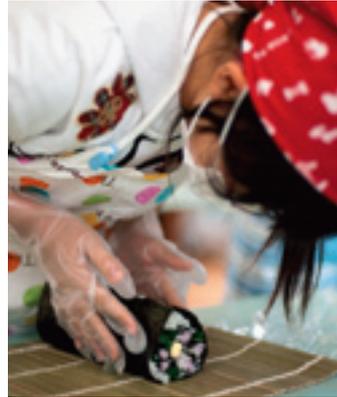
校長先生は笑顔で話します。「地域のおじいちゃん、おばあちゃんたちはずっと海とかかわって生活して

▶3年生による「海苔」の学習。昔ながらのやり方で海苔漉きを行います。この地域でとれる海苔は、全国で高い評価を得ており、海苔づくりをとおして地域への誇りが高まっています。



▲千葉伝統郷土料理研究会の会長、峯岸喜子先生が出前授業を行って下さいました。巻き方のコツやきれいに切る方法を丁寧に教えてくれます。

▶担任の中村先生。「この祭り寿司づくりの体験が、子どもと保護者が地域の伝統について楽しく話し合う機会になればうれしいですね。」



▲地場産のほうれんそうを給食室の栄養士さんが調達してくれました。ふだんの給食も、地元でとれたものがふだんに盛り込まれ、地域とのつながりを感じられるようになっていきます。

▲まるかぶりしてしまいたいぐらい、とっても上手にできました！

きたのですが、子どもたちには初めての体験であることが多いのです。目の前にあるふるさとの海を深く知っていく中で、子どもたちの中に、自分の住む町への誇りが生まれているんですよ。

子から親へ、伝統の継承

船橋市は東京の通勤圏ということもあり、湊町小学校区でも地元出身の方は4割ほどで、あとの6割は新来の住民です。近年、地域の伝統などをあまり知らない、そして知る機会の少ない住民も増えてきているそうです。

このような中、保護者も学校行事の中で「ふうかし」づくりを体験したり、子どもから海苔づくりや漁業のことを聞いたり、子どもを通じて大人の興味も高まってきているといえます。この日つくっていた房総伝統の「祭り寿司」も、家庭でつくることがあまりなくなり、つくり方を知らない人も少なくなっているようです。この日、子どもたちが一生懸命つくった祭り寿司は、おうちへのお土産になります。子どもたちが、家庭に「伝統」への関心を持ち帰り、伝えていくのです。

学校力・家庭力・地域力

◆ 仙台市立榴岡つじがわ小学校校長

久能 和夫

に導入した教科サポートなど取り組みがさらに多彩になっている。

今年度、連携・支援をより計画的かつ効率的に推進するためのカリキュラムを教師とスーパーバイザーが共同考案する中において、「開くことによって学校を守る」「人と人とのつながりの強化を図る」「プロの意識に触れる専門性との出会いの機会をつくる」といった考えのもとに、教師と保護者、地域の方々、市民センター、大学の関係者などとの連携・協働による授業づくりを進めている。

「学校力・家庭力・地域力」の三者が融合し、子どもたちと大人たちとの触れ合いの場をとおして育まれる「人とかがわる力」は、子どもたちのコミュニケーション能力の育成・自立心の涵養に結びつきは始めている。



「これからも地域のために、おじさんも頑張るから、みんなも頑張ってください」。

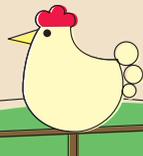
仙台にゆかりのある若き日の島崎藤村の思い出を後世に残すべく「藤村広場」を自分たちでつくりあげた熱き思いを語る授業ボランティアの地元商店主の声にじっと耳を傾ける6年生の子どもたち。

平成21年11月25日、本校を会場に開催された宮城県NIE20周年記念研究大会の公開授業における道徳の授業の一コマである。

榴岡小学校は、昨年度、文部科学省・仙台市教育委員会より学校支援地域本部事業の認定を受けた。

10年前に始まり、現在20カ所を数える学区内商店・諸施設で行われている4年生の就業体験(弟子入り)、保護者・地域ボランティアによる「朝読・読み聞かせ」に代表される長年にわたる学習支援に加え、新たに全学年

南から



「はだのっ子アワード」は、秦野の自然、風土、産業、伝統、文化等秦野の特色を生かした学習活動に取り組む子どもたちの努力をほめ讃え、ふるさと秦野を愛する子どもたちを育むことを目的に、平成19年度にスタートしました。この「はだのっ子アワード」は、秦野に関するご当地検定「ふるさと秦野検定部門」、市内の史跡・文化財、自然などについて体験マップに沿って調査を行う「体験活動部門」、市独自に行われる展示会やコンクール等で優秀な成績を収めたものを表彰する「文芸部門」の3部門で構成されています。

まだ始まって3回目の「はだのっ子アワード」ですが「ふるさと秦野検定」は夏休みの恒例行事として、例年200名近い参加があり、学校によっては夏休み中に「ふるさと秦野検定」に関する講座を設けているところもあります。「体験活動部門」では、市内の史跡や文化財などを見学に行き、「秦野にもこ

んなところがあるんだ。」「スタンプラリーみたいでおもしろかった。」等の声が聞かれるようになりました。「文芸部門」についても、「はだのっ子アワード」の対象になるということが、各コンクール、展示会等の参加者にとって、よい目標となっています。

21年度も「ふるさと秦野検定部門」2名、「体験活動部門」4名、「文芸部門」21名の表彰者が揃い、年々「はだのっ子アワード」が根付いてきたことを感じます。これから子どもたちが大人に成長していく中で、この「はだのっ子アワード」をひとつのきっかけとしながら、きれいな水とすがすがしい空気、豊かな文化を持ったこの秦野市を愛し、秦野市民として誇りを持ってくれるように願っています。

ふるさとを愛する気持ちを育む
「はだのっ子アワード」

◆ 秦野市教育委員会 教育研究所 吉田 正也

大阪府

算数・数学における 表現力・読解力の育成

◆ 和泉市立教育研究所所長

きのした
樹下 堅

全国学力学習状況調査や大阪府学力テストの結果、和泉市においても知識・技能を活用する力や表現力、読解力等に課題が見られた。そこで、本市では、学校間の校内研修の交流を図る中で、授業の工夫改善を図ることを目的として、教科嘱託研究部会を組織した。

子どもたちが算数・数学科で取り組んでいる問題は、「必ず答えがある」ものがほとんどではないだろうか。「解なし」というのも立派な答えである。「できない」から「できるようにするにはどのようにすればよいか」と考えさせることは、思考力・表現力・読解力を育成することにつながるの思いから、小学2年生を対象に次のような授業を実践してみた。

「袋の中に6本の辺があります。赤は12cm、青は9cm、白は7cm、黄は3cmです。まず、三角形を一つつくりましょう。(赤、白は各1本、青、黄は各2本)」

三角形一つは簡単にできるので、二つめの三角形に挑戦させる。しかし、もう一つ三角形はできない。ここで、子どもは困ってしまう。そこで次のように発問する。

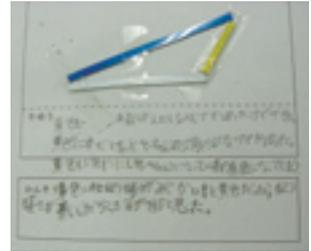
「なぜ、三角形ができないのか考えてみましょう。」

「どのようにすれば、三角形ができるでしょうか。」

できないところから第二段の学習開始。「3本の辺の内、1本だけ袋の中の辺と取りかえて三角形をつくってみましょう。取りかえた理由もあわせて、ワークシートにかきましょう。」

適当に「辺」を取りかえていた子どもが、なぜ取りかえたのかを考察することを通して、順序立てて説明する力が育つ。

今後、大阪府教育センター作成の学習指導ツールも活用しながら、算数・数学における表現力・読解力の育成を図りたい。



INFORMATION

北から

全国各地のさまざまな取り組みを紹介します。

福岡県

地域のよさに誇りを持ち、 白川を愛する子どもたちに

◆ 苅田町立白川小学校校長

上村 隆法

本校は、カルスト台地「平尾台」のふもととの田園地帯にあり、四季折々の季節感を感じることができ、とても自然環境のすばらしい学校です。地域社会や自然のしくみと自分たちとのかかわりを学習することで、地域のよさを誇りに思い、白川を愛する子どもたちを育てようとして取り組んでいます。

白川では一千年の伝統を紡ぐ「等覚寺の松会」(国指定重要無形民俗文化財)が、毎年4月の第3日曜日に行われます。この松会に4年生が踊子として参加します。事前に「松会」の行われる白山多賀神社へ行き、地域の方に指導していただいたり、先輩(5年生)から教えてもらったりして、「田打ち」と「楽打ち」に分かれ、練習に励み、祭りの一端を担うのです。

また、本校区で生産される白川米は品質の高さで有名で、地域の誇りです。第5学年の総合的な学習の時間で、「おいしい白川米をつくろう」をめあてに、地域の方や保護者の協力を得て米作りをします。はじめは、地域の方から植え方を聞き、田植え体験です。教えられた通り苗を3、4本ずつ、ひもを目印に植えますが、なかなか等間隔にまっすぐ植えられず、手作業の大変さを感じました。一



方で、米作りに従事される方の技術の高さに感動し、たくさん実ってほしいという願いを持ちました。秋には稲刈りをし、天日に干し、稲こぎもしました。脱穀機を足で踏むリズムと稲穂をかけるタイミングが難しかったようです。さらに、「とうみ」で実ともみ殻に分け、8俵の玄米ができました。そのできばえに児童は満足そうでした。

今後も家庭・地域・学校が協働し、白川を愛し誇りに思う子どもを育てていきたいと思えます。

入賞作品発表

協賛・後援 環境省 日本環境教育学会 日本環境協会 全国小中学校環境教育研究会 毎日新聞社 毎日小学生新聞

第7回目の「『地球となかよし』メッセージ」。

09年7月から9月の募集期間に、日本全国や海外から、過去最高となる1,640点のすてきな作品が集まりました。

特別賞7点、入選作13点には賞状と副賞、学校賞の2校には賞状と記念の楯が贈られました。

また、応募者全員に、一人一人の応募作品の絵はがきと、エコ素材使用のボールペンが贈られています。

地球となかよし
大賞



ちきゅうとなかよし

岡田 姫々

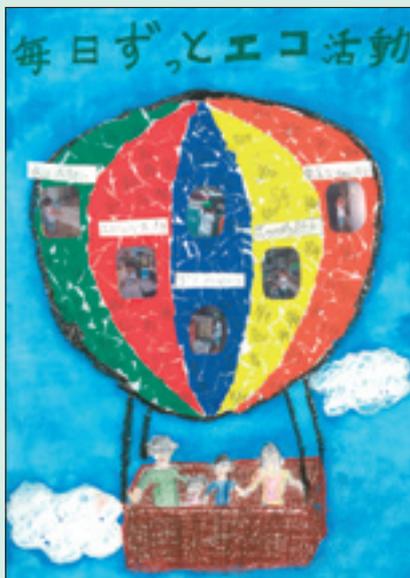
青島日本人学校小学部2年

わたしが元気にちきゅうでいきていくには、太ようとちきゅうがなかよしじゃないと、毎日毎日あたりもくらくてお花も人げんと同じ、かれてしまいます。

毎日くらくらわわたしの気もちもみんなの気もちも、くらくになります。なので、気もちや顔、あたりを明るくするには、太ようとちきゅうがなかよしじゃないと、明るく生きていけません。だからちきゅうと、太ようはいつまでも、ずうとずうとなかよしでいてほしいです。

評 おひさまとちきゅうと姫々さん。みんなみんななかよし。明るく生きたい。ピララン、いついつまでも！

環境大臣賞



毎日ずっとエコ活動

西川 弘紀

東京都府中市立府中第六小学校3年

ぼくは、夏休みに少しずつのエコ活動をつづけました。1回の活動をするごとに1まいのおり紙をはって切り絵にし、気球をかきました。一つ一つのエコをたくさんすると大きな気球をとばすぐらいの大きな力になると思います。未来の地球をきれいにするためにみんなで毎日エコ活動をしていきたいです。

評 毎日、おり紙1まいのエコ活動。気球一つに気持ちをこめて、一步一步のエコ活動。未来の地球はわたしたちの責任。



毎日新聞社賞



かくれんぼ?

永田 彩華

静岡県 西遠女子学園中学校2年

夏のある日、海岸沿いの松林に生えているテッポウユリにカマキリを見つけた。真っ白いユリに鮮やかな緑色のカマキリ。「かくれんぼ」どころか、すぐに見つかってしまう組み合わせに思えたが、そこに生えている他のユリにも同じようにカマキリがいた。よく見ると、ユリの花にいるカマキリの他に、花の付け根になる茎に別の、茶色いカマキリがいることに気づいた。久しぶりに見たカマキリが、花の上で風に揺れていたことと、こんなに狭い範囲にたくさんのカマキリがいたことに驚いたが、自然のままの、色の美しさを感じた時でもあった。

評 真夏の太陽。青い海。真っ白のユリ。緑色のカマキリ。それを見ているあなた。カマキリは自然の画家だった。

全国小中学校環境教育研究会賞



海のゴミをきれいにしよう

紺野 昭寛

東京都荒川区立瑞光小学校2年

ウミガメの太こうぶつはクラゲです。ウミガメはとう明なビニールぶくろをクラゲとまちがえてたべてしまいます。ビニールぶくろをたべると、おなかにつまってしんでしまいます。

海へ行くと、海がんにゴミがおちています。なみにのってくるゴミもあります。日本の海がんに、トラックなん千台分もゴミがながれて来るそうです。海にゴミがいっぱいあるので、ウミガメはビニールをたべてしまうのだとおもいます。せかい中のゴミをきれいにし、ウミガメやほかの海の生きものが元気にくらすようにしてあげたいです。

評 ウミガメが安心して食べ、元気にくらす海。それは、わたしたちが安心して元気にくらす世の中。なくせゴミ!

日本環境教育学会賞



青い宝物

橋本 理央

兵庫県姫路市立津田小学校5年

小さな魚をふつうの大きさの魚が食べて、そのふつうの大きさの魚を大きな魚が食べるという命のつながりや、海水がじょう湧して雲になり雨がふって山の川になって、海に流れていくような自然のつながりを思いながらこの絵をかきました。

わたしたちよりもいろんなことを知っていて、またわたしたちに教えてくれる大切な地球を人間が必要以上に楽をすることでそのそんざいが苦しむことになるのなら、わたしは楽するよりも自然にふれあひいろんなことを学んだ方がいいと思います。

評 命のつながり、自然のつながり、人のつながりを支える地球。そんなふれあひを教えてくれる地球のために。

学校賞

東京都
北区立堀船小学校

埼玉県
さいたま市立大谷場中学校

審査員特別賞



安全か自然か

竹延 真彩

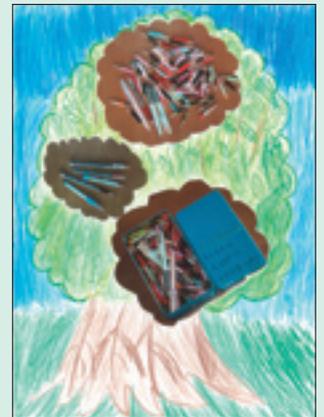
広島県広島市立砥国中学校3年

つい最近、歩行者道路の横にそって植えられていた木や花がすべて刈られた。地域の人が手入れしていた花壇も無くなり、後からできたのは自転車用の道路だった。

その道は、自転車と人がたくさん通るから自転車用の道路ができて少しは安全になったと思う。しかし、ただでさえ少ない緑や花が無くなったのはとても残念だ。その花壇は町作りや自然作りという目的以外に地域の人の優しさの象徴でもあったと思う。安全と自然を考えると、大切なのは安全だと思ふ人が多いと思う。でも、安全ばかりを優先したら、今度は自然が消失し、かえて人は危険になると思う。

評 安全と自然、どちらも大事。だが二つは成り立たない。安全と自然の両立する道は? 人間の知恵が問われている。

毎日小学生新聞賞



小さなえんぴつ

大東 怜加

京都府 立命館小学校2年

わたしは、小学校に入学してから、えんぴつがみじかくなったらほよじくを使っています。さらに、えんぴつけずりでけずれるくらいみじかくなったらはこに入れて集めます。

えんぴつは、木とねん土となまりからできています。さいごまでえんぴつを使うと、木とねん土となまりがむだにならないような気がします。みじかくなったえんぴつのはこを見るたびにえんぴつを大切に使ったんだと思います。

評 こんなにたくさんの小さなえんぴつ。たくさんペンきょうしたんだね。もっと最後まで使うとは、ありがとう。

◎審査委員の先生方(敬称略)

- 児島 邦宏 東京学芸大学名誉教授
- 林 京子 環境省総合環境政策局環境教育推進室室長補佐
- 角屋 重樹 広島大学教授
- 末吉 潤一 全国小中学校環境教育研究会会長
- 江戸川区立西小岩小学校校長
- 諏訪 哲郎 日本環境教育学会事務局長
学習院大学教授
- 小野田正利 毎日新聞社
こども環境・文化研究所所長
- 小林 一光 教育出版社株式会社 取締役社長



地球となかよし メッセージ 2009

入 選 作 品



地球となかよし

無相 遊月

京都府 立命館小学校 2年

〇せつめい

- ・ わらっている地球
みんなが地球のことを考えて、地球にやさしいことを、いろいろしている。
- ・ ないている地球
みんなが自分のことしか考えないで、地球をバラバラにしている。
- ・ 意見
地球のことを考えて、こわれてしまった地球を少しずつ直していく。そして、緑っぱいの、きれいな楽しい地球にしたい。地球がわらってくれるようにみんなできょう力する。



「真っ直ぐ、上へ」

永田 理紗

静岡県浜松市立芳川北小学校 6年

海浜植物の中でも一番海岸線に近いところまで生えている「コウボウムギ」。海岸の、乾燥して風も強く、さらに強い日差しという厳しい自然環境の中でも、地下茎を伸ばしてしっかりと根をはり、生きている。砂に埋もれてもまた上に伸びていくだけでなく、砂浜の砂が流失するの防ぐ役割を果たしている。

夏のある日、コウボウムギの、地下茎から真っ直ぐ地上に伸びる芽を見つけた。最初は何の芽で、どこから生えているのかわからなかったが、それが群落から伸びている「新しい命の始まり」であることがわかり、その力強さに驚いたと同時に、砂浜では小さな存在だけど、その大きな役割に感動した。



ぼくの出来る事

西原 正斗

東京都府中市立府中第六小学校 6年

ぼくのそ母の家には庭があるので、台所で使った水を庭の木や花にあげたりしています。生ゴミはあなをほってうめています。生ゴミは日にちがたつと土にかえているので、同じところにうめられます。

ぼくは、マンションにすんでいるので、そ母のように庭に水をながしたり、生ゴミをうめたりできません。ぼくに出来る事は台所ののこり水をベランダにある花にあげたり、水道水をむだにしない、食事をのこさず食べる、使った電気はけすといった事をやって地球をまもっていきたいと思います。



ペットボトルと水筒

高橋 生朱

神奈川県相模原市立鶴野森中学校 3年

外出の時、あなたは水筒派？ それともペットボトル派？
まずペットボトルについて。ペットボトルは、年間生産量約58万トン。ペットボトルって、リサイクルされているからエコ！って思っているかもしれないけれど、実はほとんどが焼却処分されているんだ。ペットボトルの廃棄量は年間50万トン前後。自治体が分別収集する量は30万トン弱。このうち日本容器包装リサイクル協会に引き渡されたのは15万トン余り。つまりリサイクルされているのは、ごくわずか。それに加えてもう1つ。リサイクルって地球に優しいようで実は資源の無駄なんだ。ペットボトルの分別や再生加工に必要なエネルギーは年間160万トン。これだけの石油を原材料に使えば再生するより約3倍のペットボトルが生産できる。石油を3倍も使ってリサイクルなんて……。コストエネルギーの無駄にもつながるよね……。

ほら、こう考えると、水筒って、とてもエコだよ。みんなも水筒使おうよ。



水あげを忘れないで

寺田 美幸

ロツテルダム日本人学校 中部2年

これは、うちで育てていた薔薇なんだけど、一週間旅行に行行って水をあげられなかったから、枯れちゃったんだ。私がいなかった一週間ずっと嗜れていたのも原因かもしれないって……。もうすぐ、はちの中は砂だけになっちゃうんだ。

一週間水をあげられなくて、一週間ずっと太陽が当たりっぱなしだったから、小さなはちの中で、砂漠化が起こってんだ……。

薔薇もきつと太陽が大好きだけど、水がどんどんなくなって、喉が潤いてたよね。

小さなはちの中の一週間の出来事。地球の中の何年もの出来事。地球にも水をあげないと、きつと喉が潤いてるよ。



守りたい地球。エコ。

吉原 愛実

広島県尾道市立高見小学校 4年

私のできる事とは、まず「ごみ拾い」。このままだと地球がごみだらけになってしまいます。そうならないようにごみ拾いをしました。

つぎに「マイはし」。食事をするとき、特にレストランなどなど。わりばしが出ます。木がたくさんたおされないので、このようにマイはしを使います。

つぎに「ペットボトルふる」。使ったペットボトルをすぐすてないで、水を入れ、ふるの中にたくさん詰めます。そうしたら、水のりょうをふやすこと、水がすぐさめなくなつてせつ約することができます。

色々やってみたけど、そんなにむずかしいことじゃなかったです。世界中の人が少しずつエコしていると、地球は元気がなって元にもどれるんじゃないかと思っています。



エコな時間

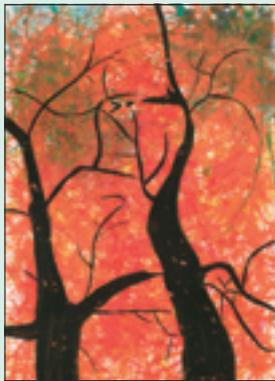
岡田 音音

青島日本人学校小学部 6年

暑い夏

ベランダをそうじする妹と私
水を足にかけていたらまたげんかになった
ベランダから見える海と空 どこまでも続く広い水平線
「あーやっぱり地球は丸いんだ。」

そんな絵を描くことになった 妹と私
太陽をあびる 今日はゲームなんかしない
こうやってただ描いているだけなのに 意外に気持ちがいい
絵が描けて なんだか 地球と仲良しになれた気がする
そして妹とも
ここにスイカとどうもろこしがあればさらに最高
時間もむだにはならない そんなエコな時間



秋にもえる

佐野 詩音

広島県海田町立海田東小学校 4年

秋になると、まっ青な空に
まっ赤なもみじが
「私の心は もえている!!」というように
大きく見えてくるのがいつも すてきだなあ
私もそんな風に もえてみたいなあと思っています。
がんばれ もみじくん!!



あたらしいのちをもらって!

小松 万祐

東京都東京学芸大学附属小金井小学校 2年

夏休みに、まい年とまりに行っている、つねのりく
んのはこねのべっそうは、家がふるくなって、雨もり
がしてきました。その家は今から80年くらい前にた
てられたそうです。とうとう秋に、たてかえをするそ
うです。ふるいけれどとてもすてきな家でした。

つねのりくのお母さんに聞いたら、「このはしら
も、ドアも、げんかんのところも、らんまも、むかし
のきょうなものだから、あたらしい家にもつかうの
よ。つかえるものを大切にリサイクルしていくのよ。」
とっていました。

わたしは何だかうれしくなりました。あかちゃんの
時からの思い出のつまった家が、あたらしいのちを
もらって生きかえるんだなあと思いました。



金柑三代

宮澤 宏枝

愛知県愛知教育大学附属岡崎中学校 3年

去年の実は橙色
今年の春咲いた花から実った緑色
この夏開花している白い花
おばあちゃん
おかあさん
そしてわたし
つないでいく 尊い命
大切にしよう 日本の自然



本当に、このままでいいのですか?

江浪 由梨亜

東京都荒川区立瑞光小学校 5年

炎天下の中、スーツを着て働いている人を見た。T
シャツの私でさえ、クーラーの中じゃなきゃとけそう
だ。あの人はそうとう冷えた室内でいないとたおれて
しまうだろう。当然、クーラーを使った分の熱風が室
外機からはき出され、更に地球を熱くしている。

なぜ、こんな暑い日にスーツを着なければなら
ないのか?

私は不思議に思う。

一番、「ストップ温だん化」をよびかけているのは、
大人の人達なのに……。

今、私たちが地球のためにやるべきことは、今の社
会をみつめなおし、世界を変えていくことだと思う。



夢に向かって 歩き出そう!

小池 美優

広島県尾道市立高見小学校 6年

私はおのみち 100キロ徒歩の旅に参加した。知らない友達
ばかりで、班をくむ。この班で5日間、旅をする。

1日歩いただけで、友達たくさんできたよ。私はとてもう
れしかった。

だが、日ざしが強い、暑い真夏に歩く。1歩1歩を、歯を
かみしめながら歩く。みんなで声掛けをし、みんなをばげます。
そんな心優しい仲間に出会えて本当によかった。ぜったいに忘
れられない仲間。

私は100キロゴールが見えた時、涙が溢れた。苦しかった
り辛かった時のことがいっぺんによみがえる。みんなの支え
があったから完歩できた。仲間が私を助けてくれた。すべての
ものにありがとう。



まもりたい!

木田 小百合

東京都府中市立府中第六小学校 3年

わたしのすんでいる家(府中市)のまわりでは、と
んぼやアゲハを見たことがありません。お母さんが子
どものころすんでいた家(長崎市)では夏にまどを開
けるとオニヤンマやアゲハやせみが入ってきたそうで
す。

今年の夏休み、長崎のぼあちゃんちで10日間すご
しました。家の中にオニヤンマは入ってこなかったけ
ど、田んぼや川の近くにたくさんオニヤンマやシオ
カラトンボがとんでいました。きみどりの田んぼの上
でオニヤンマのハネがピカピカひかっているのを見た
時、わたしはこのこうけいをまもりたい! と思いま
した。

地球となかよし ゼミナール

子どもたちのメッセージに学ぶ

教育に関するキーワードをクローズアップする「地球となかよしゼミナール」。「地球となかよしメッセージ」に寄せられた子どもたちの思いからは、さまざまな教育課題を考えることができます。今回は、2009年の応募作品から、「調べ学習」の意義について取り上げます。

「調べ学習」が育む “未来を切り拓く力”

岩手大学教育学部准教授

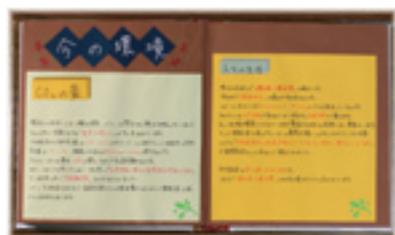
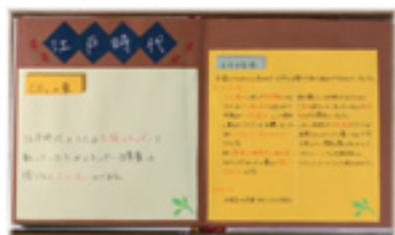
田代 高章



今、子どもたちには、「生きる力」を育むため、自ら積極的に探究し、考え理解していく体験的・活動的な質の深い学習を取り入れることが求められています。その方法として、「調べ学習」のように、子どもたちが自ら主体的に調べたり、他者と協力して調べたり議論し考え合い、その過程で対象についての情報や知識の理解を深め、それらを自分の中で吟味し直し、その成果を文字や言葉で整理・表現する活動はとて大切で、また、「生きる力」を育むためには、「調べ学習」での学習成果が、これからの社会のあり方や自己の生活や学習のあり方の創造に生きるような学習活動になることが求められています。

今の地球に必要なもの

● 吉田 佳世
神奈川県相模原市立鶴野森中学校3年



の出発点としての地球環境を守るために自分たちに何ができるか、という課題意識が明確であり、そこから、ふるしきとポリ袋という、現代生活においても、誰でもが具体的にイメージできる身近な素材を取り上げている点がユニークです。

また、調べる過程では、図書館での文献検索や関係者への聞き取りの他に、インターネット利用に際しては、情報機器操作能力のほか、多くの情報から適切な情報を選択できる情報活用能力も求められます。その点で、参照した資料や文献などがしつかりと明示されており、多様な情報の中から適切な情報を取捨選択している点も、調べた内容の質の深さを保障しています。目次、見出しや写真、色づかい、レイアウトの工夫など、見る者を意識した表現方法もすばらしいと思います。

このように、「調べ学習」は、①子どもたちが自分で調べ、積極的に実際の情報を収集でき、子どもの学習意欲を生かせる点、②単なる座学ではなく、教室外や学校外に向いての調査や聞き取りも含まれており、体験的で活動的な学習を展開できる点、③調べた情報をもとに、内容を質的に深く理解できるといふ点、④調べる過程で、将来を切り拓く自己学習にも生きる、学び方のスキルを獲得できる点、⑤調べ学習での成果を自分の言葉や文字でまとめ、表現・発信していくことでプレゼンテーション能力の形成にも資する点など、多くの意義を有しています。「調べ学習」で獲得された力をもとに、子どもたちが、私たち人類と地球の未来を真剣に考え、切り拓いてくれることを願っています。

現実から、 目をそらしてもいい



香山 リカ
(精神科医・立教大学教授)

診察室で患者さんたちを見ていていつも思うのが、「人間ってストレスにさらされると、“心の視野”がせまくなるんだな」ということ。

ある人は、まじめな顔をしてこう言った。「私くらい不幸な人間は、世界中を探してもいないと思うんですよ。」その人は会社で上司からのいやがらせを受け続けてうつ病になったのだが、それだけで「世界一、不幸」とは言えないだろう。また別の不眠に悩む女性は、「これから一生、ぐっすり眠れないんですね」とため息をついた。しかし彼女は、処方されたごく軽い睡眠導入剤で、その夜から熟睡できるようになったのだ。

このように苦しいときこそ、広い視野、長い目で見たほうがよいのに、逆にそれができなくなり、「このつらさは永遠」などと考えてしまう。おそらく、いじめにあったり友だちや家族とうまくいかずに悩んだりしている子どもたちも、同じだろう。いくら「この先、いくらでもいいことあるよ」などと大人がなぐさめても、とてもそうは思えなくなっているのだ。

では、どうやって困難に直面した子どもたちの



イラスト ひらた ひさこ・<http://kore.mitene.or.jp/~twins7yh/>

“心の視野”を広げてあげればよいのか。私は、こういうときにこそ力を発揮するのが「物語」なのではないか、と思っている。それも、長大な時間や時空を超えて飛び回る主人公が描かれている空想物語、ファンタジーがよい。『シンドバッドの冒険』『ハリー・ポッター』などの本はもちろん、活字を追う元気さえ失っている子どもなら、マンガ、アニメ、ファンタジー的な要素の多いゲームでもいいと思う。

いくら作りものの物語とはいえ、良質のファンタジーは「そうか、世の中って広いんだな」「私もここじゃないどこかに行けば、待っていてくれる人がいる！」と私たちの“心の容量”を大きくし、視野を広げてくれる力を持つ。目を現実から少しだけずらすだけで、ほっとひと息つける子どももいるはずだ。

問題があったら、そこから目をそらさずにしっかり解決しろ。大人もとかくそんな考えにしばられがちだが、「ちょっと物語の世界に目をそらしてみたら？」とやさしくすすめることも必要なのではないだろうか。

NPO法人



環境学習

応援プロジェクト

塾長・中本 賢

多摩川流域に、魚捕りが上手な「チョット変な先生」を、
いっぱいつくるプロジェクトです。

流域の小学校で、広く「多摩川学習」をしていただくための企画「多摩川塾」。
多摩川のすばらしさや、楽しさ……それに川の危険、多摩川で学習を進めるに当たって
先生方に必要な知識や経験を学習していただく「塾」です。

教師による流域ネットワーク、相互助け合いのシステムづくり……事務局を中心に
「楽しい講習会」を重ねながら、構築を目指します。

合い言葉は、「先生が、楽しくたってイイじゃないカッ！」

<http://homepage3.nifty.com/gasagasa/tamagawa-juku/tamagawa-juku.htm>

ほっとな 出会い

俳優・多摩川クラブ代表

なかもと
中本 賢さん

●まず、感じよう！

「発見、興奮、そして感動」「わかったことは覚えておこう」「教わるんじゃないって感じてよう」。僕は子どもたちへ話をするとき、この三つを必ず伝えます。環境は、理性で守るものではなく、かわいいとか気持ちいいとか好きとか、感じることから始まるものだと思うからです。となると、まず、遊ぶことが重要。環境を「学習する」以前に、原体験をしないと。親の世代や若い先生もそうですが、今の子どもたちは、ほとんど原体験を持っていません。カニをどう持っていたかわからない。水辺の歩き方がわからない。どんな生き物がいて、どんな草木があるのかわからない。そういう子どもたちに、地球環境が大切だと言っても伝わらないでしょう。

心地いいのが、楽しいのが、危険なのが。体験を通じて、まず体の中に、自然をはかり知るための物差しをつくる。その物差しがないと、自然環境を自分とかわかるものとして実感できないと思う。子どもは、地域の身近な自然で遊び、原体験を積むことが大事なんです。

僕の主宰する多摩川塾では、親子で参加する活動を多くやっています。以前は僕自身も、汚れている水を見ても、下水汚染、海洋汚染やゴミ問題を考えることはなかった。全く環境に関心がなかった僕が、環境に強烈に興味を持ったのは、自分の子どもと川で遊んで、子どもの好

奇心に引っ張られたからです。一緒に遊ぶ中で、親も子も、「感じる」ことができるんですよ。

●身近な自然を愛してほしい

子どもたちが、多摩川で水質調査をやったり、ゴミ拾いをやって、汚い川だねと学習する……この川は、この地域に住む子どもたちのふるさとなんです。汚い川は最低だという学習はどんなものかな。子どもたちはここを一生思い出して生きていかなければならない。僕は、子どもたちにふるさとを好きになってほしい。多摩川塾の根源はそこにあります。

大人が「汚い」と教えなければ、子どもは、ヘド口の中でも平気で飛び込んで生き物をとったりします。「実はこの環境が汚い」とわかるのは後でもいいんです。入り口に立った時点でいろいろわかっちゃうと遊べない。何も感じることができなくなります。

自分のふるさとを愛する。身近な自然をかわい、すてきだと思ふ。そこからもっと広い世界のことを考えられるようになると思うんです。人がどう自然とかわかるべきかの答えは、都会の山河がより多くを伝えてくれます。自分が出した下水ですから、汚染の理由を人のせいできない。自分が責任とらなきゃどうしようもない。だから、そこに棲む魚を子どもがとったとき、「これは水の汚いところにいる魚です」

なんて教えてしまふのはどうなのかな。自分の住む街を流れる川、そこで一生懸命生きているということをまず感じてほしいんです。感じることで、そのうち自分で考えるようになりますから。

●先入観を与えないで

学校のピオトープに業者から買った生き物が入れられているようなことが結構多いんですね。それで、野生種や希少種を保護しようという授業をやるんですが、実は学校のすぐ横を流れている、蓋をされた側溝に絶滅危惧種がいたりするんですよ。よそから連れてきた生き物ではなく、まず、自分たちの生活の身近にずっと暮らしてきた生き物を、頑張れよと見つめてあげてほしいし、いとしんでほしいなあ。

子どもはまだ、全く価値観を持っていないでしょう。例えば、一緒に川や側溝に行つて魚をとつて、先生が「これはすごい魚だー」って言つたら、それはその子にとって一生「すごい魚」になるんですよ。でも、これはいらぬと言つてばいと捨てたら、その魚はその子にとって一生価値のないものになっちゃう。子どもが、魚がとれてうれしい、と思つている、その気持ちを大事にしてほしい。生き物たちを愛情で包んであげて、という授業をしてほしいですね。

親も先生も、効率を求めて、どれが得でどれは価値がない、というのをやりすぎるぐらいがありますよね。それは大人側の価値から見ているだけの話。大人が子どもと触れるときには、子どもの価値観をつくっているということがあるんですよ。先入観を与えないことが大切だと思うんです。

●中本 賢 1956年東京都生まれ。「幸せの黄色いハンカチ」「釣りバカ日誌」など出演多数。1990年「多摩川クラブ」をつくり、自然環境観察などを活発に行つた。環境学習応援プロジェクトとして、流域の小学校で広く「多摩川学習」をしてもらう「多摩川塾」活動にも取り組む。



Educo Salon

前号について寄せられたご感想です。

◆巻頭、大山のぶ代さんの体験談は迫力がある。「言葉は人の考え方や生き方を伝える貴重な人間の財産であり、大切にしていかなければならない」と感じた。また、持って生まれたものを大事にするというお母様の教育にも感心した。(兵庫県 S.N) ◆「ほっとな出会い」の安藤哲也さんのお話。お父さんたちが、子育てという楽しい権利を行使し、学校の先生たちと知恵を出し合つて、ともに子どもたちの成長を見守る地域社会が作られることを期待したい。(山形県 佐藤敏彦) ◆「教育NOW」の「今すべき情報モラル教育」は大変興味深い。今、子どもたちを取り巻く情報に係る状況は、私たち大人の捉えをはるかに超える。学校教育のみならず、社会問題として「情報の教育化」を考えていかなければと思う。(愛知県 青木三芳)

なかよし宣言

わたしたちをとりまく自然や社会は、科学技術の進展や国際化、情報化、高齢化などによって、今、大きく変わろうとしています。このような社会の変化の中で、人間や地球上のあらゆる命がのびのびと生きていくためには、人や自然を大切にしながら、共に生きていこうとする優しく大きな心をもつことが求められています。

わたしたちは、この理念を「地球となかよし」というコンセプトワードに込め、社会のさまざまな場面で人間の成長に貢献していきます。